

男女差の理解と個人の尊重を子育てに

竹下秀子 (滋賀県立大学人間文化学部教授)

多様な社会文化の中で育つ男女

国立女性教育会館が2004年度と2005年度に6ヵ国を対象として実施した「家庭教育に関する国際比較調査」の報告書によると、わが子が「15歳の時にひとりのできると思うもの」(複数回答)への回答として「家族のために食事をつくる」という項目を選ぶ割合は、他の4国(タイ:85.2%、スウェーデン:84.3%、アメリカ:78.3%、フランス:56.7%)に次いで、日本では54.9%、韓国では、38.5%だった。興味深いのは、その性別内訳だ。まず、どの国も女の子について該当と答える割合が多い。しかし、その中でも日本は、女の子については68.7%であるのに対して男の子については41.4%と、該当とする割合が子の性によって大きく異なる。韓国ではその差がやや減少し、47.6%と30.6%となる。

同じ設問で「働いて報酬を得る」という項目を選ぶ割合も日本と韓国は1割前後と少なく、その割合の多い他の4国と対照的だ。ただし、この項目では、他国同様、日韓とも男女間の差はない。つまり、この調査の対象となった日本の親は、15歳になったわが子が「働いて報酬を得る」ようなことはあまり考えていないが、約半数は「家族のために食事をつくる」ぐらいはするような子に育てたい、と考えているともいえる。そしてとりわけ、女の子にそのような力のつくことを望んでいるということだろう。男の子が「僕食べる人」と言っていられる時代ではもはやないものの、「私、つくる人」を育てることは、日本では依然として女の子の親のほうに強く意識されている。

また、同調査には、わが子が「15歳くらいになった時、どのような子になってほしいと期待しますか」という設問(4件法)もあった。これに対して、「男らしく、女らしくする」ことを「強く期待する」度合いは、日本(「自分の意見をハッキリ言う」「他人と協調できる」等も含む9項目中5位)、韓国(同6位)とも、スウェーデン(8位)、アメリカ(8位)、フランス(7位)に次いでそれほど大きくない。しかし、それを男の子の方により期待するという傾向において男女差があった。つまり、女の子が女の子らしくあるよりも、男の子が男の子らしくあることへの期待がより大きい。このことは、「男らしく、女らしくする」ことを全体として強く期待するタイ(1位)にも共通している。ちなみに、スウェーデンでは6割以上が、「男らしく、女らしくする」ことを「まったく期待しない」あるいは「あま

り期待しない」と回答しており、これら否定的な回答を選択する割合が3割以下の他の5ヵ国と対照的だった。

以上に述べたように、同じ人間とはいえ、男女の育ち方・育て方、社会での存在の仕方にかかわる認識は、国により、社会文化により実にさまざまだ。この実態を踏まえれば、逆に一つの家庭や狭い地域社会で、こうあるべき、こうあるはず、という枠をはめる必要のないことがわかる。そこに生まれる出会いと互いの価値観のぶつかりあいを通して、たまたま男性か女性かの属性をもった人間同士が、どのような関係をつくりあっていけばよいのかが試行錯誤されていけばよいのだろう。そして、ともかくもそのように人類史は進んできたように思える。

胎児期にはじまる男女の違い

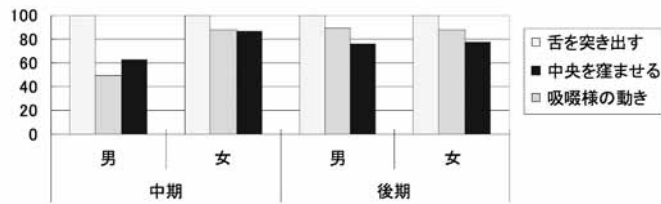
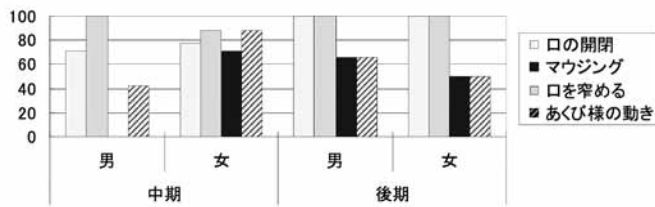
そもそも、生物学的な男女の別は、精巣の発生にかかわる遺伝子があるかないかによるのであり、受精の段階で決まる。ただし、受精以降の発生・発達のプロセスにはアクシデントがつきものであり、さまざまなレベルでの相互作用に常時開かれている。

個々の人間の社会文化の中での男女の妥当なあり方は、遺伝的に決定されているわけではない。さらに、男性、女性としての特性も含み、そこに育ちつつある子をどのように育てるかは、先述したように社会や文化の側の価値判断にかかわる問題だ。しかし、個人の主体性と人格が互いに尊重される社会をつくっていくとするならば、個人の重要な属性である男女の由来や性差の生成をめぐるさまざまへの理解を、生物学的かつ社会・文化・心理学的な多様な側面から深めていくことが重要だろう。そのようなパースペクティブのあるところこそ、各人の個別で繊細な事情に配慮した発達臨床、保育・教育実践が生みだされるのではないか。

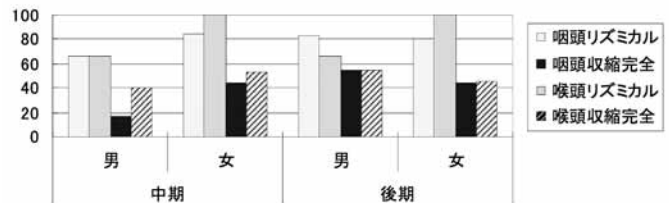
そこで、生理や心理・行動についての男女差やその発達の理解がめざされてきたわけだが、最近までの研究によって、発達における諸々の男女差がすでに胎児期から生じていることが明らかになってきた。

2D - 4D 比

まず、形態については、2D - 4D比が興味を惹く。人差し指(2D)と薬指(4D)の長さの比のこと



■図：妊娠中期および妊娠後期における、口（上）、舌（中）、咽頭、喉頭（下）の運動の男女別生起率（Miller et al., 2006 より作成）



だ。一般に女性に比べて、男性で小さいことが知られており、胎内で浴びる男性ホルモンの量が多いほど、この値が小さくなると考えられている（Robinson & Manning, 2000）。Malasら（2006）は、9週から40週までの胎児を対象として体重、頭殿長、頭囲、児頭大径、後肢長、足長、手長、手幅、指長などを測定し、これらについてはどの妊娠週数においても男女差のないことを明らかにした。手幅／手長の値についても男女差はない。しかし、2D - 4D比は、男女間で有意な差があった。しかも、その値は9週から40週までほぼ変わらない。つまり、9週までに出現した2D - 4D比の男女差が、出生までそのまま維持されるということだ。外性器の完成は妊娠11週頃といわれるので、それに先立つ時期から手指の形態に男女差を示唆する特徴が生じ始めていることになる。

口の運動

口の開閉運動は妊娠9週くらいから始まるらしい。その頻度を16週、18週、20週と縦断的に記録し、多寡に男女差のあることをHepperら（1997）が報告した。さらに、Millerら（2006）は、15週から37週の胎児の口舌部および咽頭、喉頭の各部位の生体計測とともに各部位に関連する運動の観察をおこない、妊娠中期（25週まで）と妊娠後期（26週以降）について以下の結果を得た。1）形態発達については、中期においてはいずれの指標についても男女間に有意な差はないが、後期になると舌および喉頭の幅は、男性が女性よりも有意に大きい。2）運動発達については、さらに興味深い男女差がある（本頁図）。まず、口舌部については、口を窄めたり、あくび様の動きをしたりすることが女性では中期から頻繁に見られるのに対し、男

性では後期になってから女性と同程度にまで増加する（図上）。さらに舌を下唇に向けて突き出すことは男女全員に中期から見られるが、舌の中央を窪ませたり、吸啜様の動きをしたりすることが女性では中期から頻繁に見られるのに対し、男性では後期になってから女性と同程度にまで増加する（図中）。また、咽頭および喉頭にかかわるすべての運動指標（収縮の周期性、速さ、度合い）において中期、後期とも男女差がある。いずれも、女性がよりリズムカルで完全な収縮運動を中期から示すのに対し、男性は後期になって、女性と同等の運動ができるようになる（図下）。つまり、口舌部や咽頭、喉頭の運動機能のより複雑なものは、女性のほうが男性よりもより早期に出現させるらしい。

なお、筆者らの研究グループでは、23週から33週の胎児の口開けの頻度が母親の声を聞いた時に増加するという結果を得ている（明和政子, 2009）。見知らぬ女性の声や機械音とは異なる結果であるため、次に述べる心拍と同様、口の運動は胎児の認知発達の指標としても有用であることを示唆するものだが、目下のところ、これに関する男女差は検討できていない。

心拍反応

胎児心拍は、胎児の健康状態を表す重要な指標であるとともに、胎児の神経行動学的な発達を示す指標でもある。乳児においてと同様、感覚刺激に対して胎児が注意を向けた時に心拍の減少が生じることが知られている（Groome et al., 1997）。したがって胎児心拍を測定することで、胎児が感覚刺激入力にどのように注意を向けているのか、その発達を探ることができる。Kisilevskyら（2003）は、胎児心拍を測定することで、38週前後の胎児が母親の声と見知らぬ女性の声

を識別していることを明らかにした。出生直前期の胎児は、自分の母親の声に対しては心拍加速を、見知らぬ女性の声に対しては心拍減速を示したのだ。さらに、Kisilevsky ら (in press) によれば、母親の声に対する胎児の心拍変動は 30 週前後には見られず、32 週頃に声の提示直後の心拍減速とその後的心拍加速というパターンで始まることが明らかになった。そして、出生直前期には、声の提示直後の心拍加速というパターンに変化する。母親の声に対する胎児の心拍反応の発達の変化は、胎児が母親の声に注目し、それを他でもない「母親の」声として認知するプロセスを示すものだとということになる。

さて、男女差である。上述の Kisilevsky らの研究で提示されたのは母親ないし見知らぬ女性が 2 分間絵本を読む声だったが、彼女らはこれらについて男女による反応の違いを検討していない。他方、胎児が「音」をどう聴くかについては、振動音響を刺激として提示する研究もおこなわれてきている。この振動音響刺激への心拍反応に関しては、Buss ら (2009) の研究がある。彼女らによると、1 秒間 72dB の振動音響刺激を母親の腹部から与えた前後の胎児心拍を記録し、26 週、31 週、37 週で比較した結果、男女とも 26 週では刺激に対する心拍の有意な増減はみられなかった。しかし、31 週ですでに男女間で異なる反応が生じた。まず、男性は女性に比べて刺激直後の心拍加速が 31 週、37 週とも大きい。さらに、男性は 31 週と 37 週では、心拍加速への潜時や大きさに差がないが、37 週では減速に転じるまでに要する時間が 31 週に比べて有意に短くなる。つまり、振動音響に対する心拍反応パターンは 31 週から 37 週にかけて発達的に変化する。しかし、女性の場合はこのような変化はみられない。振動音響に対する女性の心拍反応は 31 週と 37 週で違いがなく、31 週ですでに十分に発達してしまうのだ。

男女を生きる、男女の社会をつくる

以上述べてきたように、同じ人間であっても男性か女性かによって、個体発達の初期から、形態、生理、行動神経という側面において異なる発達が遂げられていく。Reinius & Jazin (2009) によれば、Y 染色体上の複数の遺伝子がすでに妊娠中期の男性胎児の脳の多くの部位で発現しているという。発達障害や精神疾患の発生において男女差があることもよく知られている。胎児期の発達におけるさまざまな側面における男女差が明らかになっていくことで、障害や疾患への理解や支援に貢献する新たな知見が得られていくかもしれない。何よりも、受精後の数ヶ月間にすでに明確になってくる男女差とその発達を理解することは、目前で発達しつつある子どもを、ありのままに理解してい

く上で大切なことだろう。

その上で、一人ひとりの人間の育つプロセスは、男性、女性という属性にかかわってもさまざまであることに改めて留意したい。2D - 4D 比が男性並みの女性もいればその逆もあるということだ。研究によって描かれる性差は興味深い科学的事実だが、それによってすべての個人の特徴を説明することはできない。生まれてきた一人ひとりの子と向かいあうなかで、「やっぱり男の子なんやなあ」とも、「なんでかな、女の子やのに」とも、それは多くの養育者が経験することだ。一人ひとりの人間がかけがえのない遺伝情報を背負って受精後の人生を生きる。生まれた社会や文化におけるさまざまな出会いと相互作用を通じて発達し、唯一無二の人格が育っていく。それを見守ることが子育ての醍醐味であり、子育てにかかわる人間が味わうことのできる無上の喜びがそこにある。

幼子はやがて友をつくり、恋をする年頃となるが、そのありようはまたさまざまだ。付き合う相手は周囲の男女のみならず、自分自身の内に育てた男女でもあり、なかなか大変だ。冒頭に紹介した調査の「男らしく、女らしくあること」として想定される男らしさ、女らしさの内容も回答者によってさまざまだろう。いずれにしても、どちらの性をどのように生きようと、それによって社会が個人に苦しみを与えることのないような「男女の社会」でありたいものだ。

(文献)

- Buss C, Davis EP, Class QA, Gierczak M, Pattillo C, Glynn LM, Sandman CA (2009) Maturation of the human fetal startle response: Evidence for sex-specific maturation of the human fetus. *Early Human Development*, 85, 633-638.
- Groome LJ, Mooney DM, Holland SB, Bentz LS, Atterbury JL, Dykman RA (1997) The heart rate deceleratory response in low-risk human fetuses: Effect of stimulus intensity on response topography. *Developmental Psychobiology* 30, 103-113.
- Hepper PG, Shannon EA, Dornan JC (1997) Sex differences in fetal mouth movements. *Lancet*, 350, 1820.
- Kisilevsky BS, Hains SM, Lee K, Xie X, Huang H, Ye HH, Zhang K, Wang Z (2003) Effects of experience on fetal voice recognition. *Psychological Science*, 14, 220-224.
- 国立女性教育会館 (2005) 家庭教育に関する国際比較調査の報告書. <http://www.nwec.jp/jp/publish/report/page16.html>
- Malas MA, Dogan S, Evcil EH, Desdicioglu K (2006) Fetal development of the hand, digits and digit ratio (2D:4D). *Early Human Development*, 82, 469-475.
- Miller JL, Macedonia C, and Sonies BC (2006) Sex differences in prenatal oral-motor function and development. *Developmental Medicine and Child Neurology*, 48, 465-70.
- 明和政子 (2008) 身体マッピング能力の起源を探る. *ベビーサイエンス*, 8, 2-13.
- Reinius B, Jazin E (2009) Prenatal sex differences in the human brain. *Molecular Psychiatry*, 14, 988-989.
- Robinson SJ, Manning JT (2000) The ratio of 2nd to 4th digit length and male homosexuality. *Evolution and Human Behavior*, 21, 333-345.